

---

give me

東雲咲夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

give me

### 【Nコード】

N8044D

### 【作者名】

東雲咲夜

### 【あらすじ】

ある部署では、行方不明事件が起きていた。定期的に、何人か、何処かへ行ってしまう。戻ってきた人もいるけれど 包帯を巻いていた。彼らは、どこへ行ってしまったのだろうか。これは、何かを欲しがるとの話。

(前書き)

それではどうも。

私が通う部署ではここ最近、行方不明事件が多発していた。身代金目的の誘拐でもなければ、殺人事件でもない。

特別変わった事もないのに、ふらりと人がいなくなるのだ。

前日まで普通に仕事していた人が、ある日突然出社しなくなる。行方不明者に、目立った特長はない。

平凡な、会社勤めの人ばかり。強いていえば、陽気な性格というくらい。

仕事でミスが多かったり、根暗な性格というわけでもない。ただ、本当にいなくなるだけなのだ。

会社帰りに、まるでちよっと飲みに行くだけかのように。

また、事件の行方不明者は、見つからないわけではない。

失踪してから数カ月後、突然発見されるのだ。

発見者は、いずれも行方不明者の家族だ。

何事もなかったように、自宅に帰ってきたという話だ。

発見者の共通点をあげるとすれば、顔全体に、包帯を巻いているという事だけ。

家族が心配して問いただすも、気にしないでくれといわれるらしい。

また、家族の前では、包帯は決して取り外すことはないという。

まるで、大火傷でも負ったかのように。

しかし、その割には、顔以外はいたって正常だというのだから、不思議だ。

そして、今私が仕事している席からも包帯顔の人は何人が見える。誰も気にしているわけではなく、いつものように淡々と仕事をしている。

かなり仕事場としては異様な雰囲気を纏っているのだが……誰も何もいわないのだからいいだろう。嫌うよりは、憐れんでいるのかもしれない。明日は我が身とよくいうけれど。取引先へ行っても、うまく仕事の話はまとまるから、すごいと思う。

包帯を巻いていなくとも、仕事が出来ない人はいるけれど。

その一人が、林君だ。

林君は私よりも、二年後に入社してきた後輩だ。

人柄もよく、書類仕事もお手の物なのだが、一つだけ欠点がある。彼は、とびきり、無表情だった。

声は軽やかに笑っていても、顔の筋肉一つ動いていない。唇がもごもごと動いただけだ。

瞬きをしているのに、ひどく無機質に感じてしまう。無表情というのは、かなりの迫力がある。

人によつては、舐められているのではないかと、怒りだす可能性もある。

おかげで、彼が取引先に行っても、十分の一くらいしか、まとまらない。

悪い人間ではないのだが、どうも癖になっているらしい。

私は配属されてから五年くらいだったが、彼が笑っているのを見たことがない。

そんな林君は、自分のデスクでスーツを整えていた。

顔を見ても、やっぱり無表情で。思わず凝視してしまった。

すると、私の視線に気づいたのか、彼が私の方を見た。

「あれー先輩。何見てるんですか？」

「なんでもないわよ。相変わらず、表情がないなって思っただけよ」

「ひどいですね。僕だって結構気にしてるんですよ？」

「だって、事実じゃない。ほら、仕事行きなさいよ」

デスクの向こうでは、部長が林君を睨み付けている。

無言で仕事に行けと催促しているようだ。言葉はなくとも眼力が語っている。

再び書類を鞆に詰め込み始める林君。

その様子がおかしくて、声を出して笑ってしまった。

笑う私をみて、ふと林君の動きが止まった。

「先輩の笑顔って、綺麗ですよね」

思い出したかのようにぼそりと呟いた。

顔を見ているはずの瞳は、どことなく虚ろに見える。

私の笑顔？ 特に普通だと思っただけけれど。

普段笑わない彼からすると、珍しいのだろうか。

「何よ。別に私は普通の顔よ？」

「そこらへんの人よりは、綺麗な笑いかたですって」

「なんか、いまいち嬉しくないのだけど？」

それより 仕事行きなさいって。ほら、部長が私の方まで睨ん

でいるじゃない。

「くおら、林！ いい加減仕事に行かんかつ」

「うわっ。はいはい、行つてきますよ」

声だけは苦笑しながら、林君は出て行った。

「あいつはただでさえ、仕事がとれないというのに……大体……」

彼が仕事にでていった後も、しばらく部長はデスクでぶつぶつと呟いていた。

彼の首がつながっているのは、仕事に対する真面目さなのかもしれない。

今日の契約は成立するのだろうか、若干気になる。少し前にとつたきり、契約が取れていないようだから。 林君も頑張っているのだから、私も頑張らないと。

少しだけ、先ほどの彼の様子が気になった。

虚ろな視線になってしまっただけ、疲れているのだろうか。

彼も何処かへ行ってしまわなければいいけれど。

後輩がいなくなると寂しいというのもあるのだけど……

人が出入りが激しいので、常にここは人手不足なのだ。  
考え事は、これくらいにしようかしら。

部長が未だに私を睨んでいるので、仕事に専念することにした。

次の日、私は欠伸をかみ殺しながら仕事をしていた。

最近残業ばかりで、肩こりがひどい。

それにやたらとクレーム処理が私のところに回ってきて、ストレスも溜まっている。

しばしばと瞬きをしながら、パソコンを見る……まだ半分くらいしか、できていない。

眠いと、仕事の効率まで下がってしまうらしい。

少し、休憩したほうがよさそうだわ。

ちらりと林君の方を見ると、何やら熱心に読書していた。

本の横には、大量の書類が積まれていた。どうやら仕事そっちのけで読みふけているらしい。部長のデスクを見ると、席を外していた。

読んでいる本にはブックカバーがかけられていて、タイトルはわからなかった。

ただ、薄っぺらいものではなく、ハードカバーなのだろうとは厚さで分かった。

ついでに、林君の分も持ってこようか。

給湯室へいって、ブラックコーヒーを入れる。熱くて濃い目のなら、やる気もでるだろう。

紙コップを二つ抱えて、彼のデスクへと向かう。

私が後ろに立っても集中しているのか、気づく気配はなかった。彼の肩を軽く叩いて、紙コップを差し出す。

「はい、林君。どうぞ」

「あ、先輩。どうもありがとうございます」

振り向いた彼は、本を片手で持ったまま受け取った。

何を読んでいるのかと、本を覗きこんでみたけど……その内容を見て、私は眼を丸くした。

「なに、林君ってこういうのが好きなの？」

「はい？ ええ、これ系統は大好きですよ！」

覗きこんだページには、『呪術大特集』と書かれていた。

カラー写真がふんだんに使用されていて、釘が刺さったわら人形の写真なども乗せられていた。

その下には、白装束などもあった。

さらに写真の下にはフリーダイアルが書いてあった。

どうやら、通販雑誌のようだ。それにカバーをかけるのもどうかと思うのだけれど。

「林君も、買ったりするの？」

私が訪ねると、彼は嬉々として答えた。

「もちろん。この本で紹介してるものは、どれも本格的なんですよ。藁人形から、ヴィジャ盤、専用のお札とか、たくさんです」

「そ、そうなの。でも、そういうのって買ってどうするの？」

「大体は、コレクションですね。藁人形なんか、一つ一つ個性があって、かわいいですよ」

一瞬頭の中に、壁にびっしりと掛けられたわら人形を想像してしまった。

ちよつと所じゃなく、怖い気がする。おまけに、それぞれに名前までついていたら末期だ。

いらぬ心配をしている私に、林君は嬉しそうに話掛けてくる。

「恋愛成就の道具とかもありますよ。どうです？ 先輩は」

「えっ。私は……いいわよ。仕事の方が大事なものの」

「つまらないですねえ。そんなに綺麗なのに」

林君は何かというと、すぐ私の事を綺麗という。私なんて、何処にでもいるような女なのにな。

「また、笑った顔が綺麗とでも言うのかしら？」

「顔だけじゃないですよ、全部です」



「あのねえ、綺麗ばかりいわれても、嬉しくないわよ?」

そういうと、彼は驚いたような顔をした。

「じゃあ、美人とかですか?」

そういう問題じゃないという事に、彼は気づいていないようだ。

安売りされてしまったら、価値は薄れてしまう。

不思議そうな声をして、彼はいう。

「女の人ってみんな、綺麗を欲しがっているじゃないですか。後は、褒め言葉とか」

もしかして彼は、女性がみんな、そうだと思っているのだろうか。

「まあ、私は違うからね? 他に欲しいものは、いくらでもあるわ」

「へえ。先輩の欲しいものって、何なんですか?」

「人に言うことじゃないでしょう? 林君は、どうなの?」

そうですねえ、と林君は腕を組んだ。

どうやら、考え事をしているようだ。とはいっても、少しうつむ

き加減の無表情だけだ。

「僕にもありますよ。すごく、欲しいものが」

ゆっくりと、彼はいった。

「ねえ、先輩なら、どうします?」

「どうするって、何?」

「欲しいものがあるときですよ。どうしても手に入れたいものがある。」

そういうとき、先輩ならどうしますか? 諦めますか?

それとも、手に入れるまで粘りますか?」

心の底から、欲しいと願うものがあつたら、か……私なら、どうするかしら。手に入れたいとは思っけれど。

「きっと、私は途中で諦めちゃうわね」

「どうしてですか?」

「私は、欲しくても、手に入れるまでが大変なら諦めるわ。ずっと欲しがるのって、大変な事だもの」

手に入れるまでが長いと、私はたぶん面倒になってしまうから。

淡泊なのかもしれない。

もしかしたら、物に執着がないのかもしれないけれど。

「僕なら、絶対に手に入れますよ。たとえ簡単には手に入らなくても、絶対に諦めません」

「そんなに、欲しいものがあるの？」

「はい。何度でも、繰り返しします。手に入るまで、です」

そうまでして、ひとつのものを求める事ができるなんて。

少しだけ、羨ましいと思った。

「さあ、そろそろ仕事しましょうよ、先輩。ほら、部長がまた怖い顔してますよ」

声だけで笑いながら、彼がそんなことをいった。

いつのまに帰ってきたのだろうかと思えばデスクを見たが、姿はなかった。

もしかして、と思って振り返ると、背後に部長がいた。

無言でこちらを見ている部長は、恐ろしい。

ちらりと林君の本にも目を向けたが、それに関しては触れなかった。

おとなしくデスクに戻る。

パソコンには、作りかけの資料が表示されたままで。

ひとつため息をついて、仕事を再開する。

窓の外を見ると、もう夕方になろうとしていた。

今夜も早く帰ることは、できそうになかった。

ひたすら目の前の仕事を片付けて、時計を見ると十一時。

早く帰らなければと、身支度を整えて会社を出た。

空を見上げると、かなり分厚い雲に覆われていた。

駐輪場へ行き、暗い中手探りで鍵穴を探した。

鍵を差し、いざ出発しようとしたときだった。

タイヤが、ぐにやりと沈んだのだ。まさかと思いつつタイヤを触ると。

見事に空気が抜けていて。ついてないけれど仕方がないので、暗

い中を歩いて帰る。

自転車だと短い道も、徒歩だと結構な距離がある。

人気のない夜道を歩いていると、不意に人影が現れた。

何処となくふらふらとしながら、こっちに向かつて歩いてくる。

酔っ払いかしら、と思っていると、人影が喋った。

「あれ？先輩ですか……もしかして」

「君　林君？」

今の声には、聞き覚えがあった。

影が近づいてきて、なんとか顔が見えた。

それは彼も同じだったようで。

「やっぱり先輩だ。どうしたんですか、こんな遅くに」

「残業がね、なかなか終わらなかったのよ」

「そうですか。夜道っていいですよねえ」

「そう？」

「はい。暗がりから、不審者が出てきそうじゃないですか！」

なんだか妙に彼のテンションが高いような気がする。

隣を歩く彼の声は、なんだか楽しそうに弾んでいる。

彼は夜だというのに、ワイシャツ姿だった。

「さつき、ちよっと取ってきたんです。俺が欲しいもの」

恐らく書店にでも行って、オカルト雑誌でも買ったのだろう。

ふと、彼のシャツの汚れに気づいた。

黒い染みが点々とついていた。

「シャツ、どうかしたの？　コーヒーでも零したのかしら」

「すごい、よく見えましたね、先輩。」

たぶん、さつきちよっと付いちゃったんですよ。気にしないで」

その格好で仕事していたのではないだろうけど……

彼のことから、ありえない話ではないと思う。

不意に横から、がさごそという音が聞こえてきた。

彼が鞆を漁っているようだ。何か探しているのだろうか。

「先輩は……」

ぼそりと声が聞こえた刹那、いきなり私は引き寄せられた。

暗くてよく見えないけれど。

一般的な抱きしめられているような状態。

「なっ、いきなり何するの」

「先輩は、俺の欲しいもの、くれますか？」

え……？ 今、彼は何と言った？

彼がいった言葉を理解するより早く。

胸に何か硬いものがめり込んで、燃え滾るようにそこが熱くなっ  
た。

熱さはすぐに痛みへと変わった。

何が何だか分からずにパニックになる。

「はやし君……今、何したの？」

よろよろと彼から離れ、自分の胸の辺りを探る。

生暖かく、ぬるりとした触感があつた。

血が、でているんだ。

そこでようやく、彼に刺されたということがわかって。

熱くて痛くて、だんだんと力が抜けていく。

そのまま私は道端に座り込んでしまった。

血を止めなければ、と焦っても、体は動かない。

そんな私に、彼がゆっくりと近づいてきた。

出刃包丁のようなものを握り締めたまま。

くらくらしながら、見上げる。

暗くなる視界の中、彼の声が少しだけ聞こえた。

「ねえ、先輩の　を俺にください」

俺は自宅に帰ると、背負っていたものを下ろした。

靴を抜いて上がり、鞆からあるものを取り出す。

真っ赤な血に塗れたもの。俺が求めてやまないもの。

本当に手に入ったかどうか、ときどきする。

鏡の前にいき、顔に当てて眺めてみる。

……今回もダメだった。

多少イラつきながら、それをゴミ箱へと投げ捨てた。  
どうしてなんだろうか。

いつになったら手に入るのだろうか。

先輩なら、俺の一番欲しいものをくれると思ったのに。

でも、今回は綺麗なものが手に入ったから。

少しだけ、いつもよりは落ち着いていられる。

血に塗れた自分の無表情を見ながら、呟く。

「俺は、欲しいんだ」

何度奪っても、欲しいものには届かないと知っているのに。

「笑顔が、欲しいんだ」

虚ろな顔や、泣き顔。

起こった顔に、歪んだ、怯えた顔はもういらないんだ。

そんなもの、いくらあっても無意味なんだ。

無表情なのは、嫌なんだ。好きでこうなったわけじゃない。

自分を守るためには、こうするしかなかったんだ。

だから、だから……俺は。

握り拳を作って、鏡を強く殴った。

高い音がして、鏡に映った俺の顔が歪んだ。

（後書き）

お読みいただきありがとうございます。

今回は、短めで頑張ってみました。基本なんか長いのはつかりの気がしましたので……はい。

さくつと読めましたでしょうか？

感想、評価などありましたらお気軽にどうぞ。

では、お読みくださりありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n8044d/>

---

give me

2010年10月8日15時17分発行